

ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥールによる「悔悛者マグダラのマリア」再検討

慶應義塾大学 大谷 公美

「悔悛者マグダラのマリア」は、16世紀後半以降「贖罪」の重要性を強調したカトリック教会の意向を受けて図像が多様化した主題であり、ジョルジュ・ドゥ・ラ・トゥール(1593-1652)にもヴァリエーション豊かな作品群がある。先行研究は、そのうち4作品を真作とし、さらに《ゆるる炎のマグダラのマリア》(ロサンゼルス郡立美術館)と《常夜灯のマグダラのマリア》(ルーヴル美術館)を同一構図と見なして、そこに一貫した構想を想定してきた。つまり、この3構図がマグダラのマリアの悔悛の諸段階中の3段階に対応する、もしくは、ラ・トゥール活躍の地、ロレーヌ公国の首都ナンシーのノートル＝ダム＝デュ＝ルフェージュ女子修道院における修道女の3つのカテゴリーに対応するといった見解を提起してきたのである。しかし、必ずしも一義的ではない鏡や光源によって、各構図を悔悛の各段階に対応させることには無理がある。また、娼婦更正を目的とした修道院が修道女をカテゴリーに分けることは一般的であり、3構図がルフェージュ修道院の各カテゴリーに対応すると主張するには、その理由を特定する必要がある。本発表は、4作品を再検討し、同修道院の詳細な検討から、特に、上掲2作品に対する新たな解釈を提示する。

まず、主題については、同時代の文学によって、4作品のうち《二つの炎のマグダラのマリア》(メトロポリタン美術館)が「現世の虚栄の放棄」の場面を、残る3作品は「悔悛の業」の場面を描いていると特定する。その上で、《二つの炎のマグダラのマリア》の聖女の平静な姿にフランソワ・ドゥ・サルやベリユル枢機卿の思想の反映が認められることを指摘したい。また、この聖女の長いスカートと対照をなす、上述2作品の「着衣でありながら膝下を露わにする」主人公の表現は他に類例がない。絵画史、社会史からも短い衣装から露出する脚が性的な墮落を意味し、姦通に対する罰、娼婦の印と見なされてきたことは明白なので、膝下を見せる2作品の主人公は明らかに娼婦である。教会が、マグダラの聖女を着飾った姿によって娼婦として表すことを禁じていたことを考慮すれば、ラ・トゥールの幼く貧しげな主人公は、「娼婦としての聖女」ではなく、むしろ「マグダラの聖女に倣って」修行する、現実の悔悛娼婦の姿であると言うべきだろう。ロレーヌ公国という画家の活動環境を鑑みれば、ルフェージュ修道院の悔悛娼婦が主人公の着想源となったことはほぼ疑い得ない。当時、同修道院は30年戦争によるフランス王のナンシー侵略を受けて、経営が困難で、妨害活動にも悩まされており、その真摯な活動をアピールする必要性に迫られていた。一方、ラ・トゥールにとっても、同修道院との親密な関係は、人的・物的な、様々な利益を期待できるものであった。本発表では、この2作品が、ルフェージュ修道院の活動をアピールすると同時に、ラ・トゥールにも利益をもたらした可能性を示唆したい。